
魔法少女リリカルなのはStrikerS 星光の殲滅者

黒龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 星光の殲滅者

【Nコード】

N5227X

【作者名】

黒龍

【あらすじ】

ベルカ時代数多くの王の中で最強と呼ばれた王がいた。その王は帝王と呼ばれ王の中では星光の殲滅者とも呼ばれていた。そんな王となのは達の出会いのストーリー

プロローグ

『プロローグ』

「ここでさよならだな。オリヴィエ」

「イヤです！！私はまだ・・・まだ、あなたに気持ちを伝えていない」

「君は良き王であり、良き女であった。君とクラウドでこの大地を・・・民を幸せにしてくれ。いままでありがとう」

「そんな・・・アリス！！行かないでください！！アリスウウウウ！！！」

赤と黒の炎が燃え広がる中、一人の男が戦場の中へと消えて行った。残された女はただ涙を流し彼の者名を叫び続けた。

これがベルカ時代最強と言われた王、帝王の最後であり王がこのあとどうなったのかは誰も知らない。

プロローグ2（前書き）

自分が読んでいて気に入らなかった。ですので、書き直しました。

どうぞ、お楽しみください

プロローグ 2

S I D E : ? ? ? ?

「アリス一佐です」

「入りたまえ」

俺はここ地上本部最高責任者レジアス・ゲイツ中将に呼ばれて中将の部屋に入った。

「中将。それで、ご用件は??」

「まずは、コレを見せてくれ」

「これは??」

「見て解かるだろう。本局が勝手にこんな部隊を送りつけてきたのだ」

資料には機動六課設立の理由とそのメンバーが書かれていた。正直言ってバカだろうこいつ等。身内ばかり集めて、しかも前線メンバーの隊長がSランク副隊長がニアSで、過去の問題児ばかり。それに、バックには聖王教会とハラオウン親子。

「俺にここのスパイしろと?」

「正確には機動七課へ依頼だ。こんな部隊君から見ても怪しいだろう」

確かに。これだけの高ランク魔導師が一ヶ所に集まるにはそれなりの理由が必要だ。これは後で聞いてみるとするか。

「わかりました。その依頼受けましょう。その代わり三人ほど部隊から連れていく」

「いいだろう」

「陸士第777部隊部隊長アリス・フラグー佐他三名。明後日より機動六課へ転属します」

ゲイツ中将敬礼をし俺は部屋を出ていった。

さて、あいつ等の驚く顔が楽しみだ。

プロローグ2（後書き）

感想　お待ちしております。

主人公紹介

主人公

名前 アリス・フラグ (男)

年齢 21歳

身長 182?

体重 75?

階級 一等陸佐

所属 陸士777部隊&機動七課

魔術式 古代ベルカ式

魔色 白銀

ランク 魔力量S+

陸戦S+

空戦S+

総合S+

性格 冷静沈着。いかなる事件であっても冷静な判断を持って事件を解決する。

趣味 読書(おもに古代ベルカにかんする書物) 料理

特徴 銀髪で短髪。黒のTシャツに白のジャケットを着ている(たまに逆もある)顔立ちは一〇人の女の全員が振り向くほどのイケメン。

デバイス

アルトリア(アームデバイス) <アリスはアルと

呼ぶ>

AI人格 女性

待機時 黒のロザリオ

モード1 日本刀(アリスが一番使うモード。鍔がリボルバー形のシリンダーになっている)

機動六課

SIDE：はやて

「う〜〜どないしよう」

「どうしたんですか?? はやてちゃん」

わたしが悩んでいるとユニゾンデバイスのリインフォース? が心配して来てくれる。

「いやな。今日地上部隊から新しい人が来るんよ」

「地上部隊!? はやてちゃんそれスパイじゃないですか」

「どうやるな。けど、大丈夫やと思うで。見てみいこの資料」

わたしはリインに新しく来る人の資料を見せた。

「え〜と・・・はやてちゃん。これは本当なのですか??」

「本当やで」

「あのアリスさんが来てくれるのですか」

「せや。あのアリス一佐や」

リインが資料を見て笑顔になる。わたしが研修でお世話になった人。また、お世話になるかもしれへんな。

SIDE：アリス

「ここが機動六課の隊舎か。無駄に綺麗だな」

『そうですね。こんなところでお金を使つなら地上に返せばいいの
に』

「腐った連中がするわけないだろう」

『それもそうですね』

相棒のアルと本局の言いながら隊舎の中に入るとオレンジでツインテールの女の子と青髪短髪の女の子が入り口の前にいた。

「すみません」

「あつ、はい。なんですか??」

「部隊長の部屋に行きたいのだけど」

「あなたは??」

「本日付でこの機動六課に配属になったアリス・フラグー佐だ」

「失礼しました!!」

二人は俺の階級を聞いて慌てて敬礼をした。

「それじゃ、部隊長室に案内してくれるかい」

「は、はい。こちらです」

機動六課（後書き）

星光の殲滅者「読んでいただきありがとうございます」

アリス

「ありがとうございます」

星光の殲滅者「今回は短めですが許してください」ペコリ

アリス「それにまだ星光の殲滅者が出なかったな」

星光の殲滅者「うっ!!」

アリス

「アル」

アルトリア「はい、マスター」

星光の殲滅者「あの〜。なんでSet upしているのですか??」

アリス「星光の殲滅」

ト

カン!!

星光の殲滅者「にやあああああああ!!」

B 定食

SIDE: はやて

「お茶が旨いなあ」

「はやてちゃん！そんなこと言っていないで仕事してくださいよ」

「無理や！こんな量できるわけあらへん！なんで報告書が紙やねん！？いおかしいやろ」

机の上には大量の紙 紙 紙の束が・・・。

「文句ばかり言っていないで仕事してください」

「せやけど。この量を今日中に終わらせることができる人はアリス一佐ぐらいのものや」

「つまり俺はワーカーホリックってことか。八神」

「へ??？」

突然の聞き覚えのある声にわたしはこの現実を逃げ出したくなりました。

「なあ、リイン。わたしの聞き間違いやりろか」

「はやてちゃん。現実逃避はよくないですよ」

「しかしやな」

「お前は研修の時お世話になった部隊の部隊長の声すら忘れたのか??？」

「いえいえ。とんでもございません」

「なら、言いたい事も分かるな」

「申し訳ございませんでした」

わたしはアリス一佐に向かって土下座しました。だって、この人を怒らせたら何されるかわかったもんやあらへんから。

「よし。特別にB定食をお前にやろう」

「……いややあ!!それだけは、それだけは勘弁してください
い」

「「……」」

SIDE：ティアナ

「よし。特別にB定食をお前にやろう」

アリス一佐が八神部隊長に何か定食を奢るみたい。けど、私が思っているのと違って八神部隊長はどんどん顔を青くしていく。

「いややあ!!それだけは、それだけは勘弁してください」

「「!?!」」

部隊長が涙目でアリス一佐に土下座して謝罪している。

「(ねえ、ティア。B定食ってなんだろうね?)」

「(五月蠅い、バカスバル。今が黙ってなさい)」

「(ティア、ひどお〜い)」

知らぬが仏。まさにこの事だと私は知ったような気がします。

B 定食（後書き）

星光の殲滅者「おばちゃん！！今日はB定食で
おばちゃん「あいよ」

アリス 「あんた誰だよ？！」

星光の殲滅者「この人は食堂のおばちゃんだよ」

アリス 「どっかのアニメに出てきそうだな」

星光の殲滅者「お残しは許しまへん」

アリス 「星光の殲滅」

ドカアアアアン！！

星光の殲滅者「にやああああああああ！！！」

B 定食は後でアリスが美味しく頂きました

挨拶

SIDE：アリス

「アリス・フラグー佐だ。俺は部隊長と違って公私混合するつもりはないからな」

「あはは・・・厳しいなあ」

「当然だ。なんのために階級があると思っている。上下関係をきっちりしていないと大事なところで甘さが出る」

「ごもつともです」

「だが、この部隊長はお前だ。お前の命に従おう」

「それじゃ、休憩中は階級付けなしってことで」

「いいだろう。それじゃ、まずはお前が残している仕事を終わるまでの監督でもしとこうか」

「へ???」

八神は『なぜ』と思える顔をしているがリインから聞いた所今日出さないといけない報告書がまだ10近くあるそうだ。それを遅れて出そうなんて甘くみるなよ。

「はら、いくぞ」

「い、いややあああああ・・・!!」

俺に連れて行かれる八神を見て八神と目が合う奴は全員目をそらした事は言うまでもなく。部屋についてから『わたし、そんなに信用ないんか』とグチを言っていた。

SIDE：なのは

「い、いややあああああ．．．!」

はやてちゃんがアリス一佐に連れて行かれていく．．．あつた目が．．．ごめんね、はやてちゃん。隣にいるフェイトちゃんも目をそらしてる。けど、さすがにシグナムさんやヴィータちゃんは．．．そらしている!!

「いいの？ヴィータちゃん」

「アリスには逆らわれないからな」

「そうだな。この私が一度も勝てないほどの強者だからな」

「シグナムが勝てないって!？」

フェイトちゃんはシグナムさんの強さを一番知っているシグナムさんの話を聞いて一番驚いているの。そういえば、地上本部に空戦Sランクを持つ魔導師がいるって話聞いた事があるの。

「そういえばリンディ母さんから聞いた事がある。地上本部には空戦Sランクを持つ魔導師がいるって」

「それがあいつだ」

「ハラオウン以外にも何人も本局の魔導師があいつをスカウトしに行ったがすべて断られてしまったみただよ」

「どうして??本局は海のほうが大事なのに」

「アリスが言うには『俺はあなたたちが勝手に伸ばした領地より、ミッドの人達を守るほうがいい』っだそうだ」

「そんな．．．」

「けど、それも仕方が無いことだからな」

「どうゆうこと」

「それは「ヴィータ三尉。それ以上話さなくてもいいだろう」・・・
「じゅめん」

「別に構わん。だが、これ以上は言うな。それは俺の問題だから
な。それより高町教導官。そろそろ新人の訓練の時間では??」

「にや??」

アリスさんに言われて時計を見てみると・・・

「にやああああ!!まずい。まずいよおお〜」

「五月蠅い、早く行け」

「はiiiiiiii」

監督

SIDE：アリス

「ううう……。無理や。もう無理や」
「しゃべれる暇があるなら早くこの書類にサインしろ」
「はいいい！！」

八神の監督をやってはや一時間。やっと今一つ目の書類が終わった。ホントこいつは要領が悪すぎる。

「八神。終わっても休憩はなしだかたな」
「……。鬼。」ぼそ
「リン。明日提出する分の書類も持ってきといて」
「はいです」
「いややああああ！！」
「口じゃなくて手を動かせ」

それから四時間半かけて今日までの書類を終わらせる。その頃には八神は口から白い物体を吐いていてリンが「はやてちゃん！！帰ってきてください！！」と叫んでいた。

「八神、そのままでもいいから聞けよ。近々もう三人俺の部隊から来るから部屋の用意しとけ」

「三人も。それは誰なんです？」

「お前が研修に来たときは長期任務行っていた俺の補佐官と分隊長の三人だ。それと部隊の方は気にしなくてもいい。俺等が抜けた

としてもやっつけていける位には鍛えてあるし、これはレジアス中將の命令でもあるから」

「わかりました。必要までに魔導師ランクと階級位は教えてもらっても」

「三人とも八神と同じ二等陸佐だ。魔導師ランクは二人がS+、一人がSS」

「それやとリミッター付きに・・・わたしますます弱くなります」

「それも大丈夫だ。特例として俺とその三人のリミッターは777部隊のリミッターとしてるから、さらに八神にリミッターが付けられる事は無い」

「それを聞いて安心しました」

「それじゃ、休憩もしたし。明日の分の半分はできるな」

「へ??？」

「余っている時間に出きるだけ仕事をしておく。そうすれば緊急な時に対処しやすいし追加がでて残業にはならないだろ」

「いや。けど・・・」

「さっさと始める」

「はいいい!!」

結局、俺と八神は明日の分の書類を終わらせてから晩御飯を食べた。ちなみに食べた時間は10時を回っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5227x/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS 星光の殲滅者

2012年1月11日00時45分発行